

第2回総合教育会議

日時 平成28年11月10日(木)午後2時～

場所 松戸市役所 教育委員会5階会議室

○白井政策推進課長 それでは、お時間でございますので、始めさせていただきたいと思
います。

本日は御多忙の中、平成28年度第2回松戸市総合教育会議に御参集いただきまして、
ありがとうございます。

開会前にお手元の資料の確認をさせていただきたいと存じます。まず、事前にお配りい
たしました資料として、次第、資料1「松戸市総合教育会議構成員名簿」、資料2「幼児・
家庭教育学級について」、資料3「未来のために今」、資料4「幼児教育振興事業 楽しい
英語あそびについて」、資料5「松戸市におけるいじめ防止対策について」。また、本日も
上にお配りいたしました資料といたしまして、全国の公立小中学校のいじめの認知件数の
表でございます。それから、学校に対するいじめ防止対策の具体的な取り組み例。あとチ
ラシでございますが、「アイ・アヤ・アミからのお願い」が小学校版と中学校版それぞれ1枚
ずつ。それから、パンフレットとして「子どもの人権 児童の権利に関する条約」。最後に、
小さいカードで、いじめ相談専用ダイヤルの電話番号を書いたカードをお手元に配付させ
ていただいていると思いますが、不足や乱丁等ございますでしょうか。よろしいでしょ
うか。

本日の会議は、15時30分までの90分間を予定している中で、2つのテーマを取り
上げたいと考えております。大変恐縮に存じますが、議事進行に御協力いただければと考
えておりますので、よろしくお願い申し上げます。

また、毎度のことでございますが、議事録作成の関係で発言前にお名前をおっしゃっ
てから御発言いただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、ここから本郷谷市長に議事の進行をお願いいたします。

○本郷谷市長 こんにちは。まず、傍聴人について御報告いたします。本日の会議には、
5人の方から傍聴したい旨の申し出があります。松戸市総合教育会議傍聴要領に基づき、
これを認めますので御了承願います。また、会議開会以降、傍聴希望者があれば、随時入
室を許可いたしますので、あわせて御了解願います。

それでは、傍聴人を入場させてください。

〔傍聴人入場〕

○本郷谷市長 これより平成28年度第2回松戸市総合教育会議を開催いたします。

第2回目の会議の議事録署名人につきましては、武田委員、伊藤委員の2名にお願
いいたします。

それでは、お手元にお配りさせていただいております次第に沿って議事を進めます。

まず初めに、資料1をごらんください。こちらが新たな構成員名簿となっております。
本会議の構成員でありました松田教育委員が10月7日に任期満了に伴い御退任され、新
たに山形照恵さんが教育委員として就任されました。このことに伴い、本会議も松田委員
にかわり山形委員が新たに構成員となりますので、御紹介いたします。

それでは、新たに構成員となられた山形委員より御挨拶をお願いいたします。よろしく

お願いいたします。

○山形委員 改めまして、10月より任命されました山形照恵と申します。5年間助産師として病院での勤務、あと松戸市の子育て広場などで9年ほど育児相談を中心として活動させていただいております。セラピストとしてのお母様へのメンタルケア、そしてチャイルド・ファミリーコンサルタントという子育てとしての専門家、家族と子どもが育ち合う中での専門家として発言させていただきます。私自身が子どもを二人育てております。小学生の娘がいますので、その部分で等身大の母親として教育について意見させていただけたらと思っております。こういう場になれていませんので、うまく話せませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

○本郷谷市長 こちらこそよろしくお願いいたします。これから本会議の構成員として専門的見地からの貴重な御意見を期待しておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、議題に移ります。教育テーマを、大きなテーマ毎、順番に議論していこうということで前回議論して、今回2回目になりますけれども、議題1として、「可能性にチャレンジする力を育みます」を前回の会議に引き続き取り上げ、時間の都合で議論できなかった幼児・家庭教育について今日は議論することといたします。

前回の議論では、言語活用科の取り組みや学力テストの結果などを踏まえ、学力向上の大きな視点で意見交換を行いました。その終盤に、学力向上を目指す中での有効な最新事例に係る議論の中で、山田委員より、福井県を例にされて、家庭で幼児より長年培われた総合的な力が大変重要であるとの意見もございました。核家族が進む首都圏における松戸市では、福井県と違う課題もあり、それを補完するため行政や社会全体で何ができるのか、本日は前回の議論を踏まえて意見交換を行えればと考えております。

それでは、協議に入る前に事務局より説明をお願いいたします。

○白井政策推進課長 先ほどの市長のお話にもありましたとおり、幼児・家庭教育につきましては引き続き議題として取り上げるものでございますが、前回の会議から時間も経過しておりますので、簡潔に事業説明を改めて行います。

それでは、最初に生涯学習推進課より御説明いたします。生涯学習推進課長、よろしくお願いいたします。

○林生涯学習推進課長 生涯学習推進課長です。

最初に、委員の皆様にはせんだって、松戸市第68回の文化祭に御協力をいただきまして、まことにありがとうございました。そしてまた山形委員さんには、私どものほうの今日のテーマになっております幼児・家庭教育の場面では、実は講師としてかねてより御尽力をいただいております。今年度につきましても1月に牧野原小学校のほうで講師を務めていただく予定になっております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、説明に移らせていただきます。御案内のとおり、生涯学習推進課では、全ての教育の出発点である家庭教育力支援事業を重要施策と位置づけております。その中で、幼児、小学校、中学校の各家庭教育学級を開設しているところでございます。最初に幼児

の家庭教育学級から御説明いたします。

幼児期は、生活や遊びといった直接的・具体的な体験を通して情緒的・知的な発達など人間として社会の一員としてよりよく生きるための基礎を獲得していく極めて重要な時期でございます。そうしたことから、子どもたちに望ましい生活習慣を身につけさせるために3歳児程度の子どもを持つ保護者を対象に、子どもや家族との関係を見直し、あわせて自分の生き方を考えていくことをテーマとして、常盤平体育館で全10講座をシリーズで毎年開催しているところでございます。また、平成27年度からは脳トレや宮城県の幼児・家庭教育の取り組みで有名な東北大学の川島隆太教授に御指導をいただき、平成28年2月27日には市民劇場で、平成28年7月23日には市民会館でそれぞれ講演会を開催したほか、松戸市版、幼児・家庭教育啓発用パンフレット「まつどっ子 未来のために今」を作成し、市及び教育委員会の関係機関や関係施設、幼稚園や保育園、産婦人科などの医療機関とも連携しながら乳幼児を持つ保護者に配布したところでございます。

なお、平成28年度からは配布した啓発用パンフレットの内容を新たにパートナー講座のテーマといたしましたが、家庭での幼児教育力の向上に関心をお持ちの保護者をはじめ、幼稚園や小学校の教員からも御要望があり、現時点で14件のお申し込みを受け、順次対応しているところでございます。

また、啓発用パンフレット「まつどっ子 未来のために今」をより効果的に伝えられるよう、PR用のポスターを作成し関係機関に配布したほか、現在同パンフレットを広く周知するためのPR映像の作成に取り組んでいるところでございます。今後、完成した映像については、ユーチューブ、ケーブルテレビ、デジタルサイネージなどの媒体を活用して広く発信してまいりたいと考えております。

なお、映像の作成に当たりましては、子ども部さんに御協力をいただきまして、文化ホール内のほっとる一むや21世紀の森と広場での森の児童館の様子も収録させていただき、松戸市の子育て支援事業の一端も紹介させていただく予定でございます。

次に、小学校家庭教育学級ですが、全ての小学校に家庭教育学級を開設しております。教頭先生と連携しながら保護者の中から運営委員を選出し、運営委員が中心となって企画運営を行う特色のある家庭教育学級となっております。学習のテーマとしては、小学生の保護者同士が家庭教育や家庭のあり方について学校と連携しながら学年の枠を超えて話し合い、交流し、豊かな人間関係づくりを基盤に自主的・集団的・継続的に学習する場として、各学校単位や合同のものを含め年間で約8講座から15講座を、また全体として各学校が開催するもの以外にも講演会や研修会、あるいは各学校代表による情報交換会等も開催しているところでございます。

次に、中学校の家庭教育学級ですが、学習のテーマとしては思春期の子どもも親も戸惑いがちな中学校時代に、子どもを見つめ、親自身がどう子どもと向き合い、かかわればよいかを考え合い、あわせて自分や家族の生き方についても見直す機会として毎年秋に市民会館で5講座を開催しているところでございます。

最後に、家庭教育支援に関する課題でございますが、少子化や核家族化、共働き家庭の増加、都市化など、家庭をめぐる社会環境の変化から、本市の家庭教育支援活動に参加できない保護者や家庭がふえており、小学校家庭教育学級の参加者も学校間で大きな格差が生じているところでございます。具体的には、人数さんが集まるところでは140人ぐらい。少ないところでは7人というような状況でございます。そこで、本市の家庭教育支援事業をできるだけ多くの保護者に知っていただくため、本年度より新たに就学時健診の際に小学校家庭教育学級のPRを開始したところでございます。現在でも家庭教育支援業務を担っている3人の社会教育指導員が中心となり、45校の小学校、家庭教育学級の指導・調整・相談対応などを随時行っておりますが、年々よりきめ細やかな対応が求められている状況でございます。今後の展望といたしましては、社会教育指導員の体制を充実させていくことを含めまして、将来的には社会教育指導員と連携して、45校の小学校家庭教育学級を地域単位で支援することができる、これはあくまでも仮称でございますけれども、家庭教育サポーターを養成し、地域の実情に即したきめ細やかな支援体制の整備も必要であるのではないかと考えているところでございます。

以上でございます。よろしくお願いいたします。

○白井政策推進課長 ありがとうございます。続いて、子ども部より御説明いたします。子ども部長、よろしくお願いいたします。

○小林子ども部長 皆さん、こんにちは。子ども部長の小林でございます。貴重なお時間を頂戴して、ありがとうございます。せっかくの機会でございますので、本題に入る前に、非常に悩んでいる案件がございますので、教育委員の皆様のお意見を伺いたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

この4月に保育園の待機児童ゼロを松戸市は初めて達成しました。そんな中で今最も大きな課題は放課後児童クラブと放課後KIDSルームでございます。放課後児童クラブは3年生から6年生に拡大されたということ。それから共働き世帯が増加しているということで利用者が増加しております。その利用者増加への対応が急務となっております。それから、放課後KIDSルーム、これは放課後子ども教室と言いまして、宿題など学習支援を目的とする文部科学省所管の事業でございます。9月議会で議員さんから質問がありまして、このKIDSルームにつきまして、放課後児童クラブは小学校45校全てでやっているのですが、KIDSルームはまだ13校ということで、全学校でやるべきではないかと。そのためには所管を教育委員会に移すべきだという議員さんからの強い質問がありまして、そんな中で、両事業を実施する上で一番の課題は教室の確保でございます。場所です。教育長をはじめ、教育委員会の幹部の皆様のお協力、御理解を得て両事業を進めておりますが、最終的には教室の活用については現場の校長先生の許可が必要となります。平成26年7月31日の通知、「放課後子ども総合プランについて」という文部科学省3局長、厚生労働省児童家庭局長の4名の連名による通知で、この両事業を推進する上においては、「余裕教室や放課後等に一時的に使われていない教室等の徹底的な活用を促進

するものとする」という通知があります。そういうことで、徹底して活用して進めなさいということでもあります。子育て支援課長をはじめ、子育て支援課の担当者からは、教室確保の現状が非常に厳しいと聞いております。議員が主張するように、教室の確保のしやすさ、それから文部科学省所管事業であるということ、目的が学習支援を主とするということ、こんなことをかんがみた場合、私は正直言って、議員がおっしゃるように、教育委員会所管でいいのではないかと考えるものであります。ちなみに、放課後子ども教室の所管については、千葉県下人口上位5市、千葉市、船橋市、松戸市、市川市、柏市と。松戸を除いて全て教育委員会が所管しております。また、千葉県下32市中27市で教育委員会が所管しております。こんなことでぜひ教育委員の皆様の忌憚のない御意見を聞かせていただきたいと思っております。

これはちょっと議題にございませぬが、本題に入る前に、後ほどで結構ですので、御意見を伺わせていただければ大変ありがたいと思っております。

では、本題のほうの説明に入らせていただきます。担当の室長から御説明させていただきます。

○藤谷幼児教育担当室長 幼児教育担当室長でございます。それでは、お手元の資料4をごらんいただきたいと思っております。

幼児教育振興事業「楽しい英語あそび」につきましては、本市が進めております子育てしやすいまち松戸を目指す施策の1つといたしまして、本年9月よりスタートした事業でございます。

目的は大きく2つございます。1つは、英語を基軸とした異文化体験や国際交流により幼児期の子どもの豊かな人間関係を育むこととでございます。2つ目は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックも見据えまして、将来の国際化社会に対応できる人材を松戸市として育成していくことにつながることを目的としております。現在は、市立保育所17カ所、約560名の5歳児を対象といたしまして外国人講師を派遣し、毎月1回午前保育時間を中心に30分から1時間程度の英語あそびを行っております。1回の活動は20人ぐらいの単位で30分程度ということで実施をしております。具体的な内容といたしましては、5歳児クラスの子どもたちが講師と一緒に英語の歌やゲームをしながら、聞くこと、しゃべることを中心に楽しく活動をいたしております。

ページをおめくりいただきたいと思うのですが、カリキュラム例が2ページ目でございますが、ごらんいただけますでしょうか。こちらの活動の進め方でございますように、毎回英語の挨拶、それから歌等から始まりまして、カードなどを使ったゲームをしながら、ジャンプをしたり、ハイタッチをしたり、踊ったりということで楽しく遊んでおります。毎月行っている事業でございますので、季節に合わせまして、外国の行事や遊びなど異文化に触れることも行っております。先月はちなみにハロウィンにちなんだゲームなどをしておりました。

なお、その次のページにつきましては、広報活動の御報告ですので、後ほどごらんいた

だきたいと思います。

説明といたしましては、最後になりますが、本事業は主として保育所保育指針における人間関係を養う力の育成と位置づけておまして民間保育園や私立幼稚園が行う活動にも補助金等の支援を行い、公立保育所以外の児童についても英語あそびに取り組んでいただけるように推進してまいります。

以上でございます。

○白井政策推進課長 ありがとうございます。以上、事業説明となります。事務局からは以上でございます。

○本郷谷市長 今3つのテーマだと思いますけども、幼児教育、家庭教育について。2つ目がKIDSルームですかね。これは放課後児童クラブも含めて教育委員会にということを言われたのですか。

○小林子ども部長 いえ、KIDSルームです。

○本郷谷市長 KIDSルームだけ。

○小林子ども部長 はい。

○本郷谷市長 それから3つ目が楽しい英語あそびという3つのテーマがありましたけども、きょうの課題は、またこれはこれで広いたくさんの課題があるので、一応各委員の、幼児だとか、あるいはこういう家庭教育だとか、一連の中について意見をお伺いして、その中から幾つかテーマを絞ってまた意見交換していただくというやり方で進めたいと思うのですが、どうでしょうか。よろしいですか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○本郷谷市長 では、まず簡単にそれぞれ持っている、幼児教育とかこういう分野で今気になっている、あるいは思っていることを発言願えればと思います。よければ手を挙げていただければと思います。

まず、本会の構成員の皆様で一人ずつご意見をいただきたいと思います。一番近いから。市場さんのほうからお願いします。

○市場委員 教育委員の市場です。なかなかまとまらない話になってしまいますけれども、まず、幼児教育、家庭教育ということについて言うと、川島先生の話は聞かせてもらいました。あの子の話としては、スマホをはじめとする電子機器とかテレビの見過ぎとか、そういうものはやはり脳の発達によくないんだとか、あと朝御飯をちゃんと食べましょうとか、そういう本当に家庭内でのしつけにかかわるような部分について、そういうことをちゃんとやったほうが脳の発達にもいいんだよという話があって、確かにそれはそう、何ていうか、本当に科学的にどこまでコンセンサスのとれた話かどうかというのはちょっと難しいところはあるんだけど、まあ、でも、恐らくそうなんだろうなという話を、いろんなデータを示して話をしてくれました。ただ、また同時に思ったのは、特にパソコンとかをただ遠ざければいいというものでもまたないだろうなと。適切な使い方というのをやっぱり教えていかないと、そういうものをきちんと使いこなせるということは、特に今

の子どもたちが大人になるころには今よりもっと重要なテクニックになっているはずなので、それを適切に使う方法を、どこかの段階で教えていくということも多分重要なんだろうなと、講演を聞きながら思った覚えがあります。

それから、KIDSルーム云々に関しては、ごめんなさい。僕は何か意見を言えるほど、現状とかがわからないので何とも言えないというのが率直なところですよ。

それから、英語教育について言うと、英語教育に松戸市は非常に、言語活用科を通じて力を入れていて、前にデータを示していただきましたけれども、例えば、英検の取得率が比較的高いとかそういう話を聞かせてもらったので、それはそれで一定の効果が上がっているのかなという気は確かにしています。ただ、英語教育と言われると僕はちょっと引かかるところがあって、異文化の人と触れ合うことが大事だということがやはり大事じゃないかなと思っていますので、先ほどそういう話もあったと思いますけど、英語というよりは、異文化の人と触れ合うことを目的にしているみたいな話がありましたので、その辺のところには重きを置いてやるのがいいんじゃないかなと個人的には思っております。

以上です。

○本郷谷市長 では、武田さん。

○武田委員 武田でございます。「可能性にチャレンジする力を育みます」というところで、昨年松戸市が待機児童ゼロ達成したというのはすごく喜ばしいことですが、イコールこういう需要がふえているということは、つまり、働くお母さんがふえているということで、家庭教育の難しさがどんどん増している。そして、核家庭になっているがゆえにより一層難しくなっているという現状なんだと思うんですね。そのような状況下で、川島先生のパンフレットを拝見しても、1日10分、週に一度の例えばホットケーキを一緒につくるなどの親子での共同作業で補うという話が載っていましたが、果たしてその時間というのは十分なのだろうかという疑問があります。松戸市は昨年「ブックスタート」という取り組みがはじまり、読み聞かせの推奨はとても効果的だと思います。その中で、後で市長に教えていただきたいのですが、市長のメッセージがついているというのがすごく気に入っていて、どんなメッセージなのか、後で教えてください。

「親子すこやかセンター」というのもまた今年度からスタートしていますが、こちらの利用状況とか利用者の方々からのお声などもまだ知る機会がないので、その辺も教えてほしいなと思っています。

それから、直接体験することが減ることで、今、市場委員もおっしゃったように、そういう子どもたちを取り巻く環境というのは決して自己発生的なものじゃなくて、社会がつくり上げているものなので避けては通れないんですけども、直接体験がいかに大切かということは、このパンフレットを読むとすごく感じられます。英語教育というのも、結局同じことだと思うんですよ。要するに、日本が島国である以上、あまり海外の方と接する機会がないので、外国人の方に直接触れるというチャンスを持つことで将来直面するいろんなハードルを下げていくことにつながると思うんですね。ただ、市場委員も同じような

ことを考えていらっしゃるんだなと思いましたが、結局、英語力を高めて何をするのかというのが一番大事で、英語ばかりを教えることよりも、むしろ何を伝え、何のコミュニケーションのためにそれを会得したいのかが大切で、そのための蓄えるべき知識とか、いろいろなものを知るチャンスというのも、学校が始まってしまうと意外と子ども達は忙しいので、その前にできることは何だろうと考えてしまいます。私自身が美術に携わっている人間だからそう感じるのかもしれませんが、日本の文化であるとか、あるいは音楽、美術、スポーツでも、そういう直接的なものでもっと幅広く触れなきゃいけないものがいっぱいあって、学校教育に入る前にそういうものがあるんだという存在だけでも知る機会をよりふやすということがすごく大事なんじゃないかなというふうに私は感じております。

○山形委員 山形です。幼児教育について私が一番仕事としてかかわって、親子さんを見てきて、このパンフレットを実際に今手にして、育児相談の中でお母様たちが言うてくることがたくさんあります。まず、このパンフレットがあること自体、松戸市は子育てについてきちんと姿勢を持って考えてくれているなということが伝わります。大切なことをたくさん伝えてくれていて本当にすばらしいなと思うんですが、実際にお母様たちがテレビを見せないとかというのは、現実的に無理だったりするんですね。やっぱり核家族なので、助けてくれる人がいないから、テレビに子育てを頼ってしまうような部分があったりするので、先ほど市場委員が言ったように、うまくつき合う方法も並行して教えながら伝えていくことが大事なんだなと思いました。

あと、しつけというところでも、朝御飯をととか、9時までというところも本当に大切なことなんですけれども、実際にできなくて悩んでいるお母様たちもたくさんいます。その部分もちょっとフォローするようなものが欲しいなと思いました。

この後、じゃあどうすればいいのか、どうやって子育てをしていけばいいのかというところでブックスタートがあるように、私は絵本をもっとたくさん活用した子育てのことをお母さんたちに届けていくことが大切だなと、幼児教育の中で思っています。家庭教育もワーキングマザーがふえて、短時間でいかによりよく子どもと向き合うか。そこでとても有効に使われるのが絵本なので、ぜひ家庭教育の中に絵本のことをたくさん入れていただきたいなと思っています。先ほど武田委員が1日10分からの子育てのかかわり、アメリカのデータなんですけれども、1日15分子どもとしっかり向き合うことで情緒の発達が豊かになるというようなデータは、確かにありますけれども、その部分もとれる親、とれない親、待機児童の問題から見ても、家に7時に帰ってきて、残りの数時間、9時までに寝かせなければならない。2時間でどのように子どもに向き合うか。そういう部分の具体的な、どのようなかかわりをすればいいかというところも、もう少し盛り込まれていくことができればと思っています。

英語あそびのところに飛ぶんですけども、様々なお母様たちが子どもをどう育てていかわからなくて、いろんな教材などを使っていきます。その中で英語の教材などもあります。私自身も子どもを育てていて、英語を学んでほしくて、小さなときにこのような教

材などをたくさん使っていました。今育てていく中で、娘たちはじゃあ英語ができるかというところではないんですけども、楽しむという部分では英語が入っていくことはすごくいいことなのかなと思っております。

異文化交流というところでは、子どもによっては、初めて外国人に会ったときに泣く子もいるんですね。幼稚園がたまたま外国人の先生が定期的に来る幼稚園だったので、娘たちはその外国人に会って、泣くこととかひるむことなどはなかったもので、そういう部分で体験として入っていくことは大事だなと思ってはいますが、何かじゃあ、挨拶が「ハロー」と言えるかとか、そういうようなこととはちょっと違う体験として起こることはいいことなのかなと思っています。

あとは、松戸市の保育園17カ所というのは、市の流れで入るんですけども、市じゃない、社会福祉法人が運営している保育園とか、あと幼稚園とかでもいろんな保育方針とか指針があると思うので、その辺なんかもこちらのほうが把握しないで届けていくのは、無理があるかとも思いました。

○本郷谷市長 把握しないでといいますと。

○山形委員 どんな保育観で保育をしているかを把握しないで、という意味です。例えば、自然保育だけをやっている保育園なのに、このカリキュラムがぼんと入ったら子どもたちはとまどうかとも思いました。

○本郷谷市長 これは強制ではありません。やっているところを補助するという制度です。

○山形委員 十分に理解しきれていなく、すいませんでした。

○本郷谷市長 いや、とんでもない。

○山形委員 KIDSルームのことで1つ。私は娘を学童保育に入れさせていただいていました。自分がいた学童保育は、保育している先生がしっかりと子どもを見てくださったんですけども、ほかの学童のお話を聞くと、ただ居場所なだけで、本当に安心して学童が過ごせるかといったところではないという部分をたくさんのお母さんたちからお話を聞いていました。その背景には、学童の専任の先生たちの待遇が気になります。お給料の部分がちょっと難しい点があるのかなというのを耳にして、なかなか長く働いてくださる方がいらっしゃらないというのをよく聞きましたので、その部分は伝えたいなと思っていました。KIDSルームというの、勉強だけを教えるといっても、宿題って、そんな2時間も3時間もかかるわけではないので、その部分でそれ以外の視点も持ったかかわりが必要なかとも思いました。

以上です。

○本郷谷市長 では、伊藤委員。

○伊藤委員 伊藤でございます。きょうのテーマに該当する分野で、松戸市が、3歳児を対象にした幼児であるとか、あるいは小学校、中学校といった、いろんなレベルで、それぞれを対象にした手段でこういったことをやっておられるというのは、ほかの全自治体のことを調べたわけではないので一概には言えないんですけども、私個人としてはきめ細

かく対応しておられるという意味では、かなり先行した進んだ対応をとっておられるのではないかなというふうに思っています。

ただ、こういう立派なパンフレットやポスターとかがあっても、その存在を知らない人たちというのはまだまだいるんじゃないかなと思いますので、いろんな機会にもっとしつこいぐらいにいろんなレベルできちっと皆さんに浸透するようにしていくべきだと思います。我々はパンフレットなどをつくってそれで安心してしまうというようなことに陥りがちなので、そうならないように、いろんな媒体、紙だけではなくて、いろんなビデオとか何かもやっておられるようですけれども、それ以外の手段も、ネットとかいろんな手段も通じて周知をどんどん進めていただければというふうに思います。

あと、小学校の家庭教育学級なんですけれども、全学校で開設をされているということで、そのこと自体は非常にいいことなんですけれども、でも、実態的にはかなりの学校で、今もちょっとお話がありましたけれども、より有効に運営するのにかなり皆さんが苦勞しておられるということで、特に出席者であるとか、今どういうプログラムを組んだらいいのかとか、それぞれの家庭の希望等も勘案し、酌み取りながらどういうふうやっていくのかというので、恐らく運営委員の方もかなり苦勞しておられるんだろうと思います。そういう観点からいうと、まだまだ実態的には、結局そういうものがあっても、なかなか各親が満足、自分たちの悩みにきちっと答えてくれるとか、あるいはそれなりの選択を与えて回答がいただけるような、そういうものには必ずしもなっていないというのが実態なんだろうと思いますので、もう少しきめ細かくそれに対して、いわゆるこの家庭学級のレベルをもっと高めていくような努力も必要なかなというふうに思います。そういう観点からも、特に共働き世代が参加できるような週末での実施とか、そういったようなこともいろいろ問題が多いんだらうと思うんですけれども、ぜひ取り組んでいただければと思います。

それからもう1つだけ、「楽しい英語あそび」なんですけれども、これは非常に画期的なやり方だと思って、私も5歳児を対象にしたそういう英語あそび、英語というか、英語をその場で覚えるなんていうことではまったくないと思うんですけれども、子どもたちに関心を持たせる1つの大きなきっかけになるということで、それをきっかけにして、あるいは1年後、2年後、学校へ行った段階で、じゃあ英語のクラス、英語の何か勉強をしてみようとか、そういった気持ちになるきっかけを与える非常にいいことだと思いますので、ぜひこれは続けて、場合によってはもう少し回数をふやすなりして続けていっていただきたいと思うし、だからこそ恐らくマスコミなんかでも大きく報道されたんだろうと思います。子どもたちにそういう異文化との触れ合いの機会を与える大きなきっかけになっていいことだというふうに私は思っております。

とりあえず、以上でございます。

○本郷谷市長 ありがとうございます。

○山田委員 続けて、山田でございます。皆さんの意見をお聞きしたのも含めて自分の考

えていることを申し上げます。

今ここに例に出されていることは、「楽しい英語あそび」も含めて、今、松戸にはある一定のベースのようなものが、共通のベースのようなものができつつあると言っているんじゃないかなと思うんです。結論として申し上げたいのは、そのベースをもっとしっかりと意識して市長部局も教育委員会も1つの姿にしていくと。その姿は発信できるものになるということになると、例えば教育の現場で、あるいは市長がそのほかの市政の場で発信するということがしやすくなるということになると思うので、1つのいい方向性のベースに乗ってきたような気がします。これは恐らく意識してこのようにしてこられたからだろうと思います。

それは、もう少し具体的に言うと、例えば言語活用科ということで、教育委員会のほうでやっております。これは英語の5年間英語というようなものが、今度はさらに下の年齢からリンクして始まっていくというようなこともありますし、それに「楽しい英語あそび」というものが連結してくるというようなこともあります。こういったことというのはどこでもできることじゃなくて、英語教育について外国人の教師がいなくてもできる体制を5年生からできるようにつくってきたというベースがあって、既に何年間か試行しているということは非常に大きなアドバンテージになってきていると思いますし、ただ一方、先ほど武田さんもおっしゃいましたけども、結局、何をやるかというところが、英語がなければ、表現する素材があってこそ身につくだろうと思うんです。これは言語活用科の教育委員会を出している表ですけど、英語分野が片一方あったら、もう片一方は日本語分野なんですよね。日本語分野で正しく表現するという点についてまた力点を置いてやっていくということを教育長からも聞いたことがあります。やっぱりこういうことが相まって何をやるかということに、それをどう英語で表現するか。あるいは英語でコミュニケーションを海外の人とどうとるか。英語に限らないで、異文化とどうコミュニケーションをとるかというのが今度重なってくると、英語教育という松戸市のカラー全体がさらに力強くなるだろうというふうに思います。

前も第1回のときに申し上げたと思うし、皆さんも多分全然異論はないと思うんですけど、やっぱり機会をどうつくるかが、今度行政とか、あるいは行政を取り巻くいろんな大人たちの役割だろうというふうに思うんです。例えばそれは、美術もそうだし、音楽もそうですし、スポーツもそうです。例えば、プロ野球の選手がアメリカに行けば、いやが応でも英語の世界に入っていくし、そこで冗談の一つでも言い合えなければチームで1つになれないと。直面しますから、絶対彼らはいろんな努力もするでしょうし、そういう環境になると思います。私たちも、じゃあ、子どもたちがこの松戸において何ができるかといったときに、例えば、表現大会みたいなものは伊藤さんも既にかかわっていらっしゃる国際交流協会でもやっていますし、いろんなそういう場をどう広げて行って、例えば日本語での表現力とか、あるいはスポーツでの交流が、そこが世界につながるような場をつくるとか、これはオリンピック・パラリンピックも関係するかもしれません。こういう場をつ

くるところを、行政でやれないことをじゃあ今度は、例えば先ほどの国際交流協会とか、あるいはそのほかに、ある程度信頼に足るNPOとか、あるいは商工会議所でも、青年会議所でも、あるいは法人会でも、ベースのあるところはあると思います。あるいは、力のある、人材のあるところはあると思いますから、そういったことを、一緒になってその場をつくる、表現の場をつくるというところをやることで、いろいろ今やっている施策が今度は非常に外にアピールしやすいし、あるいは楽しんで、例えば料理をする。親子料理コンテストみたいなものだって、市がやるわけにはいかないかもしれないけれども、そういう場をつくらうとしたときに、非常におもしろい場というのができ得るかもしれないというような気がしています。

今、御説明いただいた中で幼児教育のパンフレットについては、私も非常に共感をしております。ただ、これは今回幼児教育の専門家として、また御意見をさらに入れていただいてつながっていくと、これもまた今申し上げたようなこととか、あるいはひいては学力の向上にまで絶対つながることだと思いますので、こういうことを通して、松戸の教育が一貫性のあるものであり、かつ公教育としては他の市にない、まれに見る全体の意思というか、方針をしっかり持ったものであるということ、違いを打ち出していけるようなものによいよなるのではないかなと、楽観的に言えばですけれども、そういうふうな思いがしています。ですので、先ほどのKIDSルームも、どちらがいいか行政的にはわからないんですけども、教室の活用といった面で教育委員会であればどうなのかというような考えもあるという部長のお話だと思います。ここら辺はぜひ、よい形に、利用者が利用しやすい形になっていけばというふうには思いますので、意見ということではありませんけれども、ぜひ大きな目標に向かって適切な選択をしていただければというふうに思っています。

以上です。

○本郷谷市長 教育長、お願いします。

○伊藤教育長 今いみじくも、山田代理からベースができたという話が出たんですけども、家庭教育や幼児教育、特に家庭教育にこうやってみんなで言及できる、議論できる環境にやっとなったなというのが率直にうれしいところです。私のこれまでの経験の中で、十四、五年、20年まではいかないと思いますが、それまでは家庭教育という言葉が学校で、みんなそれぞれ、特に教員は、この子は家庭に、というふうなことを思っている、あまり出せなかった。国も、その当時の文部省は、「家庭教育」というふうな言葉を公式文書の中に一切出しませんでした。国として家庭の中まで立ち入ることはいかなるものかという議論のほうが正統派でしたから、家庭の中の子育てのあり方に立ち入ること自体、私たちにとっては、教員にとってもタブーだったわけです。それがやっとなら十六、七年前だと思いますが、国のいろんな審議会の中で家庭教育にもきちっと努力すべきだというふうなニュアンスが出されて、私たちもやっとなら家庭教育のあり方についていろんな議論を始めることができました。とは言いながら、こういうふうにみんな同じ土俵というか、ベースで

議論することはなかなかできなかったわけですが、特にここ数年間はこの首都圏ではそういう家庭教育が本当にもう喫緊の課題になってきて、その中でも幼児教育のあり方、虐待とかいろんな問題が出てくる中で、幼児教育をどうするかというのが本当に問題になって、最終目的は、私の頭の中では学力の向上なんです。学力の向上につなげることができれば、子どもたちが将来自分で生きる中での選択肢がふえる。そうすると、一人一人の自立に必ずつながるはずだと。そのために、一番今力を入れなければいけないのは、家庭教育であり幼児教育であろうということで、教育委員会としても子ども部とのリンクの部分はあるけれども、そのベースとなる資料をとにかくつくろうと。これで、要するに関心を持ってもらえればいいわけで、何かよりどころがあって、あつ、やっぱり子育てって大事なんだとか、例えば、変な言い方ですけど、今ここにいらっしゃる方々は恐らく小さいころから各家庭で勉強しなさいよとか、将来はね、とか、そういう言葉が出た家庭の中で育ってきたのかなと思います。でも、そうじゃなくてという家庭もたくさんあるわけです、実はね。そういうところで、一人でも多く将来のためにどういうことを考えたらいいかなど。そういう話題が1つでも2つでも、それこそ1日に何分かでもふえれば、そこできっかけをつかんで勉強し始める子どももいるわけですよ。あるいは将来、ああ、こういうのいいなとか、そういうふうなことをヒントに幼児教育や家庭教育のあり方がなってくればいいのかなどというふうに思います。

福井県の話が先ほどちらっと出しましたが、やっぱり教育的な文化というのが松戸の中でどういう質ができるのかなと。教育的に私たち大人がどういう文化づくりをすればいいのかなど。そういう範囲の中の1つとして家庭教育や幼児教育のあり方がこうやって話題になって、みんなで議論して、さらにまたよい方向に一歩でも二歩でも進めることができればいいのかなどというふうにすごく感じています。とは言いながら、それぞれ家庭で違うんですけど、でも、やっぱり教育委員会とか子ども部とか、あるいは教育行政全体からすると、今の小さな子どもたちが将来大人になったときのことを考えて、じゃあ、今どういふふうな力をつけさせるためにやればいいのかなどというのは、毎日毎日考えながら取り組まなければいけないと思うんですよ。その中で、先ほどの英語あそびとかが出てくるんだと私は思うんです。言語活用科も、やっぱり今の子どもたちというか、ここからどんどん不安になってくるのは、日本語でのコミュニケーション能力が私はすごく不安です。指一本で動くスマホの時代になって、ますます言葉は使わなくなるし、異文化との触れ合いも、そのための一助として必要なのかなというふうに思うし、いろんな方面からのヒントづくりをするための教育環境づくりというのが必要なのかなというふうに思います。

KIDSルームについては、確かにまだやる場所は足りない。それはわかりますけども、地域と同じように、あるいは今話した各家庭と同じように、45校それぞれ、それこそ学校というのはそれぞれ環境が違うので、もう必死になって全員ずっと動いていなければいけない学校もあるし、少しは余裕のある学校もあるしというふうなところなので、現在の十数校というのは、そういう中での精いっぱいのところなのかなというふうに私は感じて

います。とは言いながら、これはもうふやしたほうが、私たちとしてももっともふやしたいという気持ちはありますので、そのあり方についてはまたこれから議論していただくかなというふうに思っております。

○本郷谷市長 私の問題意識は、昔は、生まれて3歳ぐらいまではお母さんが子どもを育てて、それから幼稚園に行って、それ以外の社会的な勉強もその中で行い、家庭も十分時間を持っており、学校教育が終わったら、あとは家に帰ってきて家の近くで遊ぶ、という常に誰かが近くで見守る中で過ごせたよき時代が今は、社会が相当変わってきて、共働きで、子どもを一人にする時間も長く、しかも家族の単位が小さくなってきて、周りの人が面倒を見てくれないので、両親だけでとか、関係者や自治会の人だけで面倒を見ていかなきゃいけない、という社会に変わってきたということを考えると、今やっていることは、0歳から2歳のところの保育園の需要がものすごく多く、預けるところがないからということで、0歳から2歳の保育園を一生懸命整備して、環境も整えて、その社会に対応できるようにという形にしてきている。3歳－5歳は本来であれば幼稚園で十分だったのだけれども、10時から3時、10時から2時だけでは成り立たない家庭がたくさんふえてきたということもあり、幼稚園は定員割れし、一方で保育園のほうの需要が高まってきている。学校についても、学校が終わった後、家に帰っても誰もいないというような状況ができた。学童利用者について、昔は一部の人だったのがもう一般化してきているし、KIDSルームもまさに同じ中の役割分担みたいで、こういった状況をとらえたときに、学童保育は厚生労働省でKIDSルームは文科省で、幼稚園は文科省で保育園は厚生労働省、と言われると我々は困ってしまう。こういうことを考えると、家庭教育について、従来は周辺に時間的にも余裕があり、周りで、おじいちゃん、おばあちゃんも含めて近所の人が見ることで一定の質のバックアップがあった。今、それらがほとんどなくなってきて中で、どうやって家庭教育の重要性だとか必要性ということを説いていけるのかということだと思います。今はほとんど時間もなくて、教えてくれる人も近くにいない。こういう中で家庭教育をどうやって0歳のときからしていくかという、課題を考えなければいけない。虐待とか、いじめで亡くなられる子どもたちの半分は0歳なのですよね。これは、望まない子どもということもあるかもしれないが、このようにうまく育て切れない家庭が増えてきているということもあって、家庭教育の重要性が、従来とかわって必要ということをおわかってもらう事が必要だと思う。

それから、保育園をいっぱいつくって待機児童ゼロしたが、これはもう社会的なニーズでやっており、3歳－5歳は幼稚園を強化して、保育園に移らなくてやっていけるようにということで、今預かり保育をがんがん強化して、幼稚園がやりやすいように一生懸命やっています。ここで懸念しているのは、幼稚園に行った子と保育園に行った子で、小学校に入った後、その後の将来を含めて、同じようなちゃんとしっかりした子が育っていったらもらえるのかという心配があるのですよ。幼稚園は教育、片一方は保育では困るのですよね。やっぱり両方の要素が要るということになると、今、幼稚園を強化して教育だけじゃ

なくて保育、も行っていくために、幼稚園には年間何百万円という支援もしていますし、幼稚園で預かり保育を利用した場合には最大2万5千円支援しているのだけでも、一方で、保育園は預かっていけばいいのかということも考えなくてはいけない。家庭でできなかった幼児教育、あるいは幼稚園でやっていた教育を保育園でやっていただきたい。保育園は今どっちかという待機児童ゼロという数的な議論が多いけども、中で行われることをちゃんとしていかないといけない。片一方は文科省、片一方は厚生労働省だから違うなんて言われたら預かっている我々も困るし、家族も、行くところによって全然違っては困る。やはり、保育園での教育、それから幼稚園での保育、この強化というのは両方大変必要だなと感じる。

これらにあわせて、家庭のお母さんたちの、3歳－5歳に対する家庭教育のあり方というのも変わってくると考えている。それから小学校に入ると今度は学校が終わったって家庭に任せないため、すごい時間があいてきている。遊んでいけばいいかと、いえばそうではなくて、例えば一方で学童が遊んでいるだけの預かり場を利用して、他方で余裕のある家は帰ってきてから塾へ行ったり、いろんな習い事をやったり、それなりに子どもの教育を一生懸命やっている状況ができてしまい、この格差がまたでき上がってしまう。

それで、教育委員会に教育長を含めて伝えているのは、従来は、学校が終わればあとは家庭の問題で任せていたけれども、昨今では家庭の間までの時間がものすごく長くなって、学校が終わったからといって学校の責任が終わるんじゃないくて、学校は家庭の方に預けるまでが教育委員会としての責任だということ。だから、学童の場所を確保し、質を確保する。あるいはKIDSルームを確保し、場所も確保し、教育のレベルも、指導者もしっかりさせるといことも教育委員会の仕事だと。そうしないと誰も見るときがないから困る。だから、KIDSルームは教育委員会にして、学童保育は子ども部なんて、何を考えているのだと思う。学童もどっちも文科省にしてもいいのだし、教育委員会のほうでちゃんとやればそれでもいい。学校が終わって、片一方は教育委員会のKIDSルーム、片一方は学童でまた別々の政策にしたら困るのは家庭だと思うし、子どもたちは一元的に見ていかなきゃいけないという意味で学校の責任も変わってきているし、それから家庭の教育の内容も変わってきているし、あと学童とかそういうものの役割も、従来のものから相当広がってきている。そういう中でやっぱり今1つずつ課題をしっかりとらえて家庭の教育について考えていくべきだと思う。家庭環境は千差万別あるということを前提に、やっぱり家庭教育の問題、あるいは幼稚園の問題、保育園の問題、学校の問題をぜひ考えていただきたい。子どもは今もう既にいるわけだから、それに対しても対応しなきゃいけないということで、できるだけ早くいろんなことをやりたい」というのが私の気持ちです。

○山田委員 いいですか。市長の意見に重ねちゃって恐縮ですけど、子どもたちの放課後の時間をどっちが見るとい責任の問題じゃないよと今お話がありました。厳密に法律的な管理責任どうこうじゃなくて、グランドデザインをちゃんと示すという責任がここにあるという意味では、多分そういうような意味で松戸市も非常に、ランナーで走っているほ

うとしては前のほうじゃないかと私は思っているんですが、そのところの、もっと子どもたちの教育の、まさに生まれてから学齢の時期をずっと過ごしていく間の何かそういうお話が子ども部も含めて、何かそういうことがここで、もしくは別の場で協議ができて、それを各幼稚園、保育園もそれぞれ努力して、工夫してやっていらっしゃるから、基本的にはいい方向に収れんしていく力学があるんじゃないかと私は信じてはいるんですが、市としてこういうようなことをやっていきましょうよ、松戸市ではということ投げかけるようなことができるのであれば、先ほど申し上げた外部の団体も含めて、そのピースを埋めていくようなことができるのであれば、割とできるんじゃないかと思うので、どなたにお願いしたらいいのかわかりませんが、ぜひそういうグランドデザイン、そういったものを市民に示して、ああ、こんな松戸で育てたいと、やっぱり言わせたいというふうに改めて思いました。

あと、ちょっと1つだけ。私の子どもがちょうど中3で高校受験をしていて、ある私立高校の説明会に私もついていきましたら、英語で短文の作文があるらしい。そのテーマが、要は時事で、興味があることについて何百単語かの短いエッセイを書きなさいという試験で、さあ何を書いたらいいかと。お前の興味があるものは何だと。いや、今、大統領選挙だとか言っているから、本当かお前と。それはニュースでやっているけど、違うだろうと。お前はバスケットボールでしょうと。多分、想像すれば。バスケットボールだって書けるし、英語で留学をする、オーストラリアの高校に行くと言っている同級生がいる。英語をやりたくて今むずむずしている。英語のことについてだって、もしかしたら書けるかもしれないと。自分の本当にやりたいことって何だという話をしたんです。多分そういったことなんだと思うので、そういう接する機会として、入試までそこを求めてくるとすれば、なおさらそういったことが機会をつくるということ、ぜひちょっと重ねてやれたらいいなと思って発言しました。

○山形委員 先ほど市長から0歳の虐待死という話がありましたけれども、やっぱり望まれない妊娠の部分で、ちょっと話が飛ぶかもしれませんが、性教育ですね。そういう部分でも啓発がとても必要なんじゃないかなと思っています。実は、日本の中絶件数は18万件に減ったんですけれども、10%が10代で、残りが20歳以上の成人女性が中絶をしている現状というのがあつたりしますし、あと日本の60%ぐらいの女性が今じゃなかったと思って産んでいるという現状があるんですね。本当に授かりたくて産んでいる人というのは30%ぐらいだそうです。なので、そういう部分での啓発なんかも大切なことかなと思いました。

子育てに関して、子育てをすごく価値が低く感じている親御さんが多いのではないかと思います。「子育てしかしていないから私」という感覚なんですね。お母様たち、親たちの、お父様も含めて、親の自己肯定感の低さみたいなものをとても感じます。子育てが大したことないみたいな感覚でやられているんですが、子育てこそ最高の人材育成とか、人こそ環境なので、あなたたちはすばらしいことをやっているんだというような、マインドをア

ップするような発信なんかもできたらいいのかなと思っています。

幼児教育の専門家として1つ。教育スキル、何か英語だとか、習字だとか、公文だとか、いろんな啓発の学習があるんですけども、根底に安心感、安心した気持ちとか安全な気持ちで過ごせる家庭、居場所とかというのがとても必要なのかなと思っています。なので、学童保育やKIDSルームなども、何かをなさなければならないような、宿題しなさいと言われていたら、厳しい家庭と一緒にになってしまう。そんな、勉強しなさいと言ってくれる親がいるような家庭だったらまた別ですけども、逆に言えば、本当に伸びやかに生きていらっしゃる方って、実は親があまり勉強しなさいと言わなかったんじゃないかなと思って、私は勉強しなさいと言われなくて育ちました。それよりも引き出す、その子を見て引き出すようなかわりを親がしてくれたり、あとは周り、社会がしてくれたりとかしたので、その部分があるのかなと思っています。

家庭教育、幼児教育の中で実践的にすぐに取り組めることが、ブックスタートの延長線の絵本を導入しながらとか。図書館をたくさん、もっと活用してほしいですし、広場にもボランティアの読み聞かせの方がいらっしゃったりするんですけども、豊かな言葉こそが大切な幼児の心というか、大人もそうなんですけども、大人自身の言葉が育っていない。何でも「やばい」で済んでしまうような感じですよ。本当に言語が育っていないので、親が本を読むことで、親自身も言葉に触れること。あと武田さんのように美術とか文化に触れている方、親も見たことのない絵を見るという、とても心のゆとりなんかにもつながるんじゃないかと思います。特にワーキングマザー世代なんかは、本当に帰ってきて御飯を食べさせてお風呂に入って寝るような感じ、あと学童に預けているお母さんたちも、預けて帰ってきて、宿題やったの、やっていないので寝る。朝起きて学校に行く。また、親は仕事でいない。そんな本当に悪循環な、ちゃんとしたかわりがないようなことがふえるので、その部分は絵本を通して育まれるんじゃないかなと思いました。

あとは、妊娠期間に関してももう少し啓発が必要なかなと思います。先ほど言ったような、親に対する自己肯定感というような部分で、妊娠していることを肯定して、特に父親の参加が劇的に今は少ないので、妊娠期間からもっとお父様たちの気持ちを揺さぶるようなかわり、あとおじい様、おばあ様ですね。ぜひその部分の啓発なんかもして、地域を揺り動かすような形での啓発をお願いしたいなと思っています。

以上です。

○市場委員 今のお話でちょっと教えてもらいたいことがあるんですけど、例えば、今妊娠期の家庭で父親のかわりがすごく少ないという話が、でも、僕なんかの親の世代はもっと少なかったんじゃないかなとイメージします。立ち会い出産なんかする人はまづいなかったんじゃないかと思います。そういう時代と比べて、今はまだ少しいいという認識なのか、それともそういうことを含めてやっぱり今悪くなっているという認識なのか、ちょっとその辺どうなんだろうと。

○山形委員 今、少しよくなっているとは思いますが、現状、見せかけのイクメンと

というような形で、僕はお風呂に毎日入れていますと言っていますが、実際にお湯を張って、上がった後の赤ちゃんのお世話は全部お母さんがやっていて、入れている現場だけをやって、「やっている」とか、ごみを捨てていますとあって、集めたごみを運ぶだけのお父様とか、そんなのでやっていますという感じなんですね。でも、実際に、お母様たちって、実はやってほしいことよりも、お母様のメンタルケアのほうがすごく重要で、きょうどうだったかとか気遣ってほしかったり、大切にしてほしいかかったりとか、そういう部分のほうに本当は大切なので、夫婦関係からしっかりと子どもを二人で見るといところを向き合っていてほしいと思っています。実際に母親学級、両親学級に、私は12年前に松戸市の両親学級に行かせていただいて、妊婦服とかもその短期間にぱっと着ては思ったんですけど、育児のやり方をぱっと教えるような感じだったんですけど、最後に、「どんな親になりたいですか」というあり方をやっとな聞いてくれたんですよ。もっとそういう啓発をしていくことが大事なのかなというのがありますね。どんな家族になりたいかみたいな部分が、家族のグランドデザインというのがあまりにもなさ過ぎる家族が多いし、そういう情報すら私たちは提供していないですね。ライフプランみたいな部分とか、そういうのもちょっと必要なのかなと。ただ、今の三十二、三歳くらいの男性から家庭科が必修になったので、家事とかそういう部分に、やるという抵抗感はかなり少なくなって、家でやってくれるという声は少し多くなっております。

○山形委員 ちょっとよくなっています。

○本郷谷市長 家族になりたいかと考える機会が必要だと思います。ほとんどそういう意識もなくして日常を過ごしている場合が多いのかもしれないですが。

○市場委員 さっき教育長から、家庭教育という話がようやくできるようになったという話がありましたが、こんな家庭をつくりましょうというようなことは、なかなかやっぱり、言うのは今だって難しいんじゃないかなと思うんです。こういう、こういう、いろんな選択肢、いろんなものがありますよ。ある程度具体的なイメージを持てるこういうものもありますよねというようなことを提示できたらいいのかなというようなお話ですよ、恐らくね。

○伊藤教育長 そうですね。ですから、今、やっぱり教育というこのテーマがすごい難しいのは、一人一人みんな違う意見を持っているということですよ。それぞれが全部恐らく正しい。とは言いながら、食い違う部分もすごく大きい。その中で、例えば行政は何をやるか。今、そうやってオープンにしていろんな意見が出た中にもいろんな課題がありますよね。じゃあ、それを全部、例えば行政でやるかという、これはもうとんでもなく大変なことになる。ですから、いろんなステージを用意して、ここは行政がやりますよ。ここはそれぞれ頑張ってくださいよとか、そういうふうな切り口を示せる段階に早くなればいいのかなというふうには思います。例えば、幼児教育でパンフレットは頑張ってつくってもらいました。ところが、多分これは乳幼児期ですよ。小学校からの目という、プレプライマリーの部分で必要なものというのはまだないわけですよ。ですから、そっち

にも着手しなきゃいけないのかなという思いは、学力からするとあります。そういうふう
にいろんなところでケアする部分、行政が支援しなければいけないところというのはどん
どんふえてきているので、どこまでをこうやって線引きしたほうがいいのかとか、どう
やって示そうかなとか、先ほどPRが足りないという、啓発が足りない、やっぱり、そう
いう部分もどうやってやったらいいのかとか。課題は本当に多いんですけれども、きちっ
と精査しながら取り組んでいかなきゃいけないのかなとますます思いますよね。

○武田委員 今のお話を全体的に伺っていると、ここの3つ掲げている、確かな学力、豊
かな心、健やかな体という知・徳・体の中で、やっぱり確かな学力と健やかな体というの
は本当にベースで、そこが危ういという環境がいかに多いかというのは、私は教育委員会
に参加させていただいて初めて現実的に知りました。ただ、このベースを固めながらも、
やはりもう1つ加わっている豊かな心を育む機会を、そこここに配っていかないと、触れ
るチャンスがないままに大人になってしまう。すごく子ども時代は短いんですよ。それ
なのに忙しいんです。親も忙しいかもしれないけれども、今、親の空き時間の理論ばかり
言っていたんですけども、だったら、もうやれるのは学校の中しかないという状況下で、
実際の評価5段階とかに、きちんと目に見える形以外の知るべきこと、体験すべきことと
いうのはたくさんあると思うんですよ。全員がそれを会得しなくてもいいから、うっす
ら体験することで、100人、200人の中に2人でも3人でも10人でも、そこから何
かに気づく子が出てくるということが、将来総体的には市の中の文化レベルを上げたり、
いろんな可能性のある子どもが育っていくということでどんどん社会に寄与していく人材
育成に繋がっていくと思います。そこのところをやはり面倒くさくてもやっていかなきゃ
いけないんじゃないかなというふうに私は思います。カリキュラムに準じて授業や学校行
事をすすめるだけでも多忙な先生たちを見ていると、そんなに何でもプラスしてって言っ
たら「何を言っているんだ」と言われそうで怖いんですけども、それでももうちょっと
盛り込むことが出来たら、もっと多方面に興味を持つ子は増えていくと思います。

○伊藤教育長 多分そういう思いは持たれると思います。でも、何校か見に行かれて、も
う目いっぱいなのは見えている。

○武田委員 見えています。

○伊藤教育長 そうですよ。だから、それこそ今話題になっているどこかの宣伝会社み
たいな勤務状況が1校1校それぞれあるわけなので、要するに、一人一人各家庭によっ
ても違いますよね。そうすると35人、例えばクラスの子どもたちがいると、35通り抱え
るわけですよ、担任というのは。ですから、一人二人でも、例えば電話が1時間、2時間
必要な対応が毎日、そういう子が一人いたとすると、そのために2時間なら2時間毎日使
うわけですよ。もうものすごい仕事量になる。そこに、今おっしゃられたようなものを
ぽっぽっと入れていくというのはなかなか、これは難しいことになるということなんです。
これは、私なんかの現役時代よりも毎年毎年きつくなっていると思います。

○武田委員 学校の授業プランの中に入れ込むんじゃないなくてもできることはあるんじやな

いかというふうに、やっぱりそのところは思うんですよね。思っていた以上に厳しいというのは、本当に今教育長がおっしゃったとおりで、自分が想像していた以上に学校現場というのはこんなにも頑張ってくださっているというのを本当に痛感せざるを得ないんです。でも、その余力のある子どもの部分を引っ張り上げるだけの先生の思いみたいなものが、できればもう一歩、できれば何かもう1つという気持ちが、今具体的なことをここでは申し上げませんが、やはりありますね。それは、平均的な子どもばかりをつくっていいのかという思いなんです、私の中の。平均以上とか最低限のベースというのは非常に大事なんだけど、平均にいかなくてもこのところはすごくいいみたいな特化した子は結構いるもんなんですよ。そういうところを酌み取るチャンスというのがないと、やはり何か学校は息苦しいとか、何か枠にはめられている気がしてしまうとか、自分がそういうタイプの生徒だったのでそう思うのか、やはりここかという気持ちがどうしてもある。

○伊藤教育長 私は、しばらく前よりは、いろんな個性を引き出す割合というのはずっとふえていると思います。だから、各学校によって経営も全部違うじゃないですか。本当に生徒指導で昔大変だったころは、各学校がもう1,000人ぐらいを抱えているのが松戸はざらでしたから、どうしても一律の指導しかない。その時代に比べたら、今は本当に子どもたち一人一人を見て、上の子はぐっと、あるいは個性のある子はぐっと引っ張り上げる部分は多くなっているというふうに思います。昔は髪の毛にぐっと手を入れて、これ以上だったらもう指導するという、そういう時代でしたからね。

○山田委員 幼児・家庭からちょっと離れつつあるので、戻すと、だから、そういう感性を育てる部分というのが必要だよということは、多分誰も反対はないと思います。学校の中にどう織り込めるかはまた今後議論をみんなで行いましょう。それで、ぜひそういうような機会があるという、そういうような機会というのは、感性を育てるような機会があるというグランドデザインをどう誰の役割でやるかはぜひこれからでも話をしていって、例えば東京藝術大学というのがあります。そのサテライトみたいな形で、もし松戸でいろんな活動がなされるとしたら、あそこの今本が出ていますよね。藝大生って何の人たちって言うんですか。「最後の秘境」と呼ぶ者あり）最後の秘境、東京藝大ですね。やっぱり、とてもそういう意味では可能性があるエリアにあるということのポテンシャルをぜひ生かしたいと思うので、そういうところでは、武田さんもぜひ……。

○武田委員 東京藝大が図らずも出たので、私は藝大出身者じゃありませんけれども、元学長と話をしたときに、今学生につけるべき一番大切な力は、自分の作品を説明する力とおっしゃったんです。それって今松戸市がまさにやっている言語活用科のことで、さっき図らずもおっしゃっていた、何を英語で表現したいんだと。まさにそのことで、さすがに大学生ですから、自分の作品を説明する力を日本語で説明して、更に英語でということ喚起しているそうです。つまり、大学生でもそれを授業の中でやらざるを得ないところにある。表現者たることをしようとしている学校であってでも、秘境生であってでも、それ

を学ばせたいと先生の側が思っている。それをもう小学校、あるいはもっと下の段階から進めようとしている松戸市の取り組みというのはすばらしいなと思います。教育長がおっしゃるように、ぜひ日本語の部分を、本当にスキルアップしないと、そのところに追いついていかないというふうに本当に心から思いますね。

○伊藤委員 まさにそれは日本で不足しているというか、我々の世代ではほとんどやってこなかったことですね。私はアメリカの大学で感じたんですけども、彼らはとにかくディベートをします。さらに立場をお互い入れかえて、それぞれの利点とか何かを含めてお互いにディベートをするという、ディベートすること自体が目的になっているような、そういうやり方、勉強の仕方というのをしてくれているので、やっぱりそういったものが日本ではかなりもともと不足していたと思います。そういう観点からいけば、松戸が低学年のレベルから自分の意見をきちっと言ったり、あるいは人の立場に立って意見をきちっと言うとか、そういうようなことをやるということは非常にいいことだというふうに思うので、これからもぜひそういったことは続けていっていただきたいというふうに思います。

それから、今までの関連で、我々の世代ですと1学年50人以上で、先生が一人で、確かに一人の先生が見る生徒の数というのは今に比べて相当多かったわけで、それから思えば、今の先生たちというのはもっとよく子どもたちのことが見られるんじゃないかなと私は思っていたんですけども、やっぱりそこは、昔とは違う色々な要因で、一概にその数が減ったからよく見られるだろうというわけではないんですね他方、今、我々の世代にはなかったようなこういう家庭教育学級というものを、各小学校でそれぞれつくっているわけですので、その中で一人一人の親のことをきちっと対応できるというようなことはないんでしょうが、ある程度共通の悩みというのは、恐らく、親の間であると思うので、そういった共通の悩みに対して、こういう対応があつてこういう成功例があり、失敗例がありますよというような形できちっと話すことができれば、それを受け取る親が、同じような悩みを持っている親というのはいると思うので、そこが何かうまく回答になって、そういう学校、小学生で自分たちの子どもに家庭でどういう勉強をさせたらいいのかとか、こういうことをやっているとか、これに対してはどう対応したらいいのかというようなことについての例というか回答は、親のほうから十分引き出せるのではないかなと思います。何か先ほどの話で非常に参加者が少ないということでありましたけれども、何かそこでもっと魅力的なテーマなり、魅力的なやり方、参加しやすいようなやり方を工夫するなりして、せっかくあるそういう家庭教育学級ですので、それは何かもつとうまくやって盛り上げていただきたいなというふうに思います。

○山形委員 今、家庭教育学級についてのお話で、子どもが1年生のときには家庭教育の委員として入って実際にやらせていただいたんですが、正直に、本当にワーキングマザーは参加したくてもできない現状がとてもあったので、実際に私の行っている学校は、委員になった人だけしか勉強に参加ができないシステムというか、そういう流れになっていたんですね。全校500人保護者がいても、委員になっている何十人かだけが運営をし、参

加をし、オープンにみんなでどうぞというのはないですね。そういう学校がもし多かったとしたら、ほかの参加できなかったお母さんへの家庭教育の機会を奪ってしまうと思うので、もう少しそこをオープンにさせていただけたらいいなと思っていました。

土曜日とか週末とか祝日に、ぜひワーキングマザーのお母様、お父様も兼ねてですけれども、やっぱり両親が参加できるような魅力的なプログラムはとても必要だと思います。子どもと一緒に参加できるような、小学生の体験型のプログラムなんかは親が参加したいと思ったりするかもしれません。キッズニアのような体験型のものができるのと、とても親も参加したいですし、子どもも興味・関心、あと芸術性とかがそういうところでぴゅんと引き出せるものが出てくるかもしれないと思いました。

あと、もう1点だけ、家庭教育学級は小学校、中学校にあるんですけど、幼稚園、保育園のお母様たちには啓発がないですよ。今、おやこDE広場に行っていて、0から3歳までの、お仕事をしても活用している人はいるんですけど、お仕事をしていない主婦の方が来て私に相談したり、ほかのコーディネーターなどに子育てのことを聞いたりとかはしているんですけども、あと常盤平で行われている幼児教育というのもおおむね3歳までと言っていましたけれども、3歳から学校に入るまでの保護者に向けての学び場が少ないなとは思いましたので、その機会も、ぜひ幼稚園さんは、幼稚園の指針・方針とともに、そういう学び場とか役員が主催してとか幼稚園の勉強会があると思います。保育園はなかなかないと思うので、保育園のママこそ何か家庭のことを今後伝えていったりとか、子どもの発達のことなどももっと知っていつてもらえたらなと思っています。

以上です。

○本郷谷市長 特に保育園に行っているお母さん方にそういう情報提供だとか必要な対象かもしれないですね。

○山形委員 はい。

○武田委員 今のは、小中の家庭教育のところは幼稚園、保育園の親御さんが参加できるか……

○山形委員 いえ、違います。

○武田委員 そうじゃなくて、別の形ですか。

○山形委員 別で、保育園は保育園に行っているお母さん、小学校は、ある小学校、A小学校のやっている家庭教育学級というのが、今、実際多分どこもそうだと思うんですけど、委員になった、役員になった方が講師を呼んだりそういうのを、プログラムを全部準備して、委員になった人だけが参加できる形なんですよね。そこをほかの、委員になっていないお母さんたちも入れてほしいというのが1点と、あと保育園、幼稚園に関しては全く別で、川島先生の講演会みたいなものを、そんなに川島先生のようなビッグな方じゃなくてもいいので、等身大の保育園の園長さんのお話とか、3歳から5歳の間で、学校に入る前にちょっと何か学んでおいてほしい、親に整えてほしい、例えばしつけという部分でもいろんな家庭のしつけの仕方とかがあると思うんです。例えば、食育とかもいろんなこと

があると思うんですけど、そこでちょっと参考になるような話が聞けることとか、あと小学校に入る前に小1の壁とよく言われていることがあるので、そういうことを整えるような講演会などが開催されてもいいのかなと思いました。

○山田委員 偽装イクメンじゃなくて、さっき何て言ったんでしたっけ。

○山形委員 見せかけの。

○山田委員 ああ、見せかけ。偽装なんてもっと悪いこと言っちゃいました。どきっとするわけでしてあれなんですけど、やっぱりそういう場面で、今一緒に子育てをする、一緒に悩みながら子育てをするということが必要だということはもう絶対だし、例えば、育休なんかも、社会の中でも男がとることも当たり前になってきているという流れからいくと、ぜひそういうことを対象にしたことを、これまた市内の教育委員会でやるということなのかどうかは別にして、ぜひ、今度はコンテンツというか、例えばこういう先生の、あるいは、先ほどのお話でいえば園長さんのお話を聞くようなことは、お集まりいただければ市のほうで御紹介しますぐらいのことは、お金をあまりかけずにできるようなことはぜひやっていければいいなと思いますね。

私は、七、八年目になる教育委員なんですけれども、最初の教育長には、いや、家庭教育は難しいんだよと言われていて、もちろん伊藤教育長ではない時代ですけども、そうなのかと思って、でも、そこをちゃんとやらないと学力なんか伸びないよなと私も思っていたところからいくと、さっき教育長がおっしゃったように大変変わってきた。そのときに家庭教育学級の御報告を常にされるんです。担当課の方がされて、でも、それでは参加者は少ないよなというのは私も思っていました。だけど、先ほどの御報告を聞くと、でもそこはやっぱりもっともっと伸ばせるというか、伸びる、あるいは形を変えるということは可能なんですかね。そこにもっと力を入れるべきなのかなとも思ったんですけど、それはどうですか、現場のお考えは。

○林生涯学習推進課長 少ない背景にあるのは、先ほどからお話が出ているとおり、共稼ぎであったりいろんな背景もありますが、あとは学校の規模がやはり大きな学校と小さな学校がございます。例えば、参加する比率が同じだったとしても、1クラスの数の少ないところだとおのずと少なくなってしまうわけですね。そういうところが、さっき申し上げたとおり、7人とかというクラス編成になってしまうところもあります。それで、今そういったことをどうやって手を打つかということで、皆様からお話が出ているとおり、きめ細やかな対応ということで私どもスタッフが、私も4月には全校を回って校長先生、教頭先生に御協力をお願いして動いていますけれども、うちの担当者もこまめに学校に顔を出して委員さんたちの御相談に乗りながら、例えば今やらせているのは、小さい学校は隣の学校と一緒に合同で研修会をやったらどうですかと。例えば、山形先生のような委員さんをせっかくお呼びしても、7人だけで共有するというのは非常にもったいない話なので、多分私どもの指導が至らないんだと思うんですけども、私どものほうからすると、ふだん学級委員に入れられないお母さんたちも、そういうときはどうぞ呼んでくださいということを

今徹底しております。あるいは夏休みだとか、そういう時期にはぜひ親子で星空観察会でもいいですよ。あるいはいろんな工場見学だとか、いろんな社会体験もどうぞしてくださいということで、今指導はさせていただいております。恐らく、山形委員からお話があったようなこともありまして、今いろいろ工夫をさせていただいているところなので、必ずしも、学校規模によっても影響が出てきちゃう部分もあるので、大きな学校になると、結果的に参加者も多いという状況がありますので、その辺は苦慮していますが、ですから先ほど申し上げたとおり、今後はもう少し踏み込んだ形でよりきめ細やかな対応をするための体制づくりということで進めてまいりたいと考えております。

○山田委員 ありがとうございます。それをお聞きして、情報発信の軸がなり得るのであれば、やっぱりそこなのかもしれないなと思ってきょうお聞きしていた次第です。KIDSルームの問題も、放課後児童クラブだと思うんですけども、そういうところの親の会みたいなのがあって、自主運営に近いお祭りをやったり、お父さん方のつながりも非常に強いところは強いです。PTAはお母さん中心かもしれないけれども、そういったいろんな核が点在しているので、ここを、何が軸なのか、松戸市のグランドデザインの発信するベースというか、これをぜひちょっとみんなで知恵を集めて組んでいって、そうすると、打っていく政策が反映されやすくなるのかなというのがまた、先ほどの保育園の親の集まりというのも、これももしかしたら親の集まりなのか、啓発の場ができるときの受け皿になり得るのかなというふうに思っていますので、そんなことを思ってちょっと最後お聞きしました。

○本郷谷市長 本当に必要としている人は大抵働いている人のほうなのだろうと思います。時間があって集まってこられる人のほうはお互いに情報交換がしっかり出来る。また幼稚園で運営を中心にやってくれる人というのは大体専業で運営している。来られない人たちのほうが、本来であればいろんな情報交換をする必要があると思う。それであれば、休みだとか、土日とか参加しやすい設定を含めて、いろいろやっていただくことが必要かもしれない。回数についても、年に1回とか2回ぐらいの開催じゃしょうがないので、本当にいろんな情報交換して、困っているお母さんたちとか、変な話だけでも、うまくいっていない家庭とかを含めてみんなでやっていかなきゃいけないということだと思います。やり方はどうするかは別として、もっともっと広がりがあるようにしていかなきゃいけないと思います。子どもたちだけじゃなくて、お母さんとかお父さんに対する教育みたいなものも含めて重要になってきていることだというふうに思います。子どもを育てる環境をつくり上げることが教育委員会の仕事の1つだと思うので、ぜひ力を入れてほしいなと思います。

本会議は、何か答えを出さなきゃいけないというわけではなくて、いろんな意見交換をする場ということでテーマを決めてやっていますので、今日いただいたいろんな意見を参考にしながら、また担当の部門が議論を進めて深めていただければと思います。今日はこれで予定時間が来ました。

もっと話したいことありますか。

○武田委員 また次回に。

○本郷谷市長 次回でいいですか。きょう予定していたいじめの問題を次回やりたいなと思います。これはまた重要な課題ですし、ぜひまたいろんな意見を聞かせていただければと思います。

よろしいですか。

○白井政策推進課長 次回の総合教育会議の開催でございますが、緊急な議題が生じた場合を除きまして、来年度の春ごろと考えていますので、そのときにいじめの問題ということで取り上げさせていただければと思っています。具体的な開催の日程につきましては、教育委員会事務局と協議してお知らせいたしたいと考えています。

連絡事項につきましては、以上でございます。

○本郷谷市長 開催の頻度とテーマ等については、もしあれば意見を事務局のほうに言っていただければと思います。

それでは、予定していたのはこのテーマだったので、これを持ちまして、第2回の総合教育会議を終了したいと思います。よろしいですかね。では、これで終わります。どうもお疲れさまでした。